ルワンダ難民キャンプから

# 北サハリンへ緊急出動

## 残留邦人も通訳で参加

日ぶりに救出され、応急診療所で手当てを受け十四歳の少年。ただちにヘリコプターでオハにばれた＝ネフチェゴルスクで、鎌田さん撮影

五月二十八日、北サハリで大地震が起きた。翌二九日、国際医療援助チーの一人として現地に初め入り活動した。

◆濃霧を突いて

二十八日夜、自宅の電話で「サハリンへ出を願う。チェチェン帰り宅君（AMDAのメン）と旧ユーゴ・クロアラ帰りの早川君（同）と行ってほしい。明日、函館経由サハリン行きのチャーター機がスタンバイしている」。AMDA（アジア医師連絡協議会）本部からの連絡だった。

さっそく、冬支度を出しての準備となった。翌朝、ロシア大使館にビザ発給申請をしたが、間に合わない。定期便で羽田から函館に飛び、岡山からのチャーター機と合流した。ビザなしで飛ぶことに決めたが、サハリンの空港着陸許可が下りない。三十日、何とか着陸許可のみを得て、雨の稚内空港を離陸、宗谷海峡上空の濃霧と乱気流を突いて、われわれの双発セスナ機はユジノサハリンスク空港に着いた。

駆け寄ってきた入国管理官は険しい顔をしている。ビザがないからだ。国境警備隊兵士も集まってきた。こりゃ、困った。

◆理解者を得る

しかし、サハリン日本協会やロシア科学アカデミー会員のヤン教授など日本に理解を持つ多くの人々の助力をえて、なんとか入国と医薬品の無税通関が認められた。

まず、被災地から多数の負傷者が送り込まれている州立病院に向かい、クラッシュシンドロームによる腎不全治療の血液透析に早川医師が参加、救援医療活動が始まった。

阪神大震災と同じく混乱する現地行政（ロシア中央政府、サハリン州政府）との折衝を繰り返し、現地に入ったのは六月一日だった。

ユジノサハリンスクから軍用機で八百キロ北のオハへ、さらにジェットヘリで百二十キロ南の被災地ネフチェゴルスクへ。そこで見た、高さ三メートル五メートルのがれきが巨大な畑のうねの様に何本も並ぶ光景は想像を超えていた。

ようやく着いたクレーン車が動き始めているが、まだまだ足りない。州政府医療チームの医薬品も不足しがちだ。学校のグラウンドがヘリポートとなり、救出された負傷者をオハ病院へ運ぶため、数機のヘリコプターが絶え間なく発着を繰り返している。

がれきのわきには被災者の男性が泣きながら立ち、「ここに妻と子どもが埋まっている」と訴えている。彼らは零下になる夜もそこを動こうとはせず、救出を待っていた。現地本部の裏には多数の棺桶（かんおけ）が積み重ねられ、腐敗の始まった遺体の埋葬が続けられているが、身元の確認も十分ではないようだ。

緊張度の高い被災者、救援隊の人々も、日本からの医療チームとわかると「ありがとう。この惨状をぜひ日本に伝えてくれ」といってくれた。

◆第二陣到着

翌日、第二陣八人が十六トンの医薬品とともに到着した。空港で出迎えてくれた数人の東洋系女性の目に涙があった。戦後五十年、当地で苦労した残留日本人の方だった。「母国日本からよく救援に来てくれました。戦後初めて、日本人であることを誇りに思えました」。ロシア語通訳に不自由していたわれわれに百万の味方になってもらった。

これから第三陣として、全国より託された救援物資六十トンを送る予定だが、前述のように、数多くの人々の協力で、今回の活動が行われていることを報告したい。

鎌田　裕十朗氏

鎌田さんは、災害や戦争による難民の医療救援活動をしているAMDAの会員